

審査の結果の要旨

氏名 ピローネ セルジオ

本論は主として第二次世界大戦後に発表された日本はもとより世界の住宅プロジェクトを取り上げ、住宅および居住の諸相において **flexibility** という概念がどのように適用されたかを検証するものである。従来、住宅の融通性は日本の伝統的住宅に固有の特徴と考えられてきたが、著者が定義する **flexibility** という概念を導入することによって、近現代の都市居住に対するさまざまなプロジェクトを系統的に位置づけることが可能になる。

著者は **flexibility** 概念の第一義的な特質として、①流動性、②多面性、③転換性、④伸縮性、⑤修正性を挙げ、まずはその定性的整理を行っている。次いで住宅・居住に焦点を絞り、その概念を建築構造的側面と機能的側面に適用し、a.可動性、b.組立／分解、c.適合性／対応、の各類型を導き出している。

こうした基礎的作業を経た上で、各類型の展開を逐一検証し、次の8つの性質を発見した。すなわち①ニュートラルな利用、②フリープラン、③自律的な決定、④平面的展開、⑤垂直的展開、⑥変形性、⑦可動性、⑧情報化が、近現代住宅および居住における **flexibility** 概念を編み上げる主要な手法であり、その妥当性を数多くの住宅作品分析を通して確かめている。

本論は従来曖昧のまま議論されてきた住宅の融通性ないし柔軟性について、はじめて理論的にアプローチし、そこにあらわれる類型や特質について総合的な視点から蓋然性の高い整理を行った点が高く評価できる。最終的に導かれた8つの類型手法は従来の住宅プロジェクトを捉えるうえで、きわめて有用な視点をわれわれに与えてくれる。

しかし著者の本論における真のねらいは決して空間の体系化にあるのではなく、むしろその多様な組み合わせから構想される、今後の都市居住のあり方への戦略的提言にあることに注目しなければならない。第二次世界大戦後の日本を題材にとれば、急激な都市化・都市の高密化は、狭小な住宅供給や持ち家志向というかたちで現象したことは疑いないが、その一方で日本の住宅は西欧のそれと比較して、壁やソリッドな躯体によって分断させる公と私、家族と個人という性格は比較的弱く、むしろ居住環境の視点から見ると、ニュートラルな利用や自律的な空間の決定が潜在的に継承されてきたように見える。こうした空間のフレキシブルな特性は、今後の持続可能な都市居住戦略を考えるうえで、欠かすことのできないものである。

以上を要するに、本論は従来必ずしも明らかでなかった住宅および居住の多面的性格を、**flexibility** という概念で再定義し、実証的な理論整理を行ったうえで、今後の都市居住のあり方を展望したという点で、建築学分野における当該研究レベルをさらに押し上げることに成功したと評価できる。よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。